

ESD地球市民村の開催

「ESDに関するユネスコ世界会議」に向けた市民の集い「ESD 地球市民村」が東京で開催され、これまでESDに熱心に取り組んできた多様な主体によって、その成果と課題、今後に向けた展望が議論された。

文：地球環境パートナーシッププラザ 平田裕之

多様な参加者が描く未来とは

我が国の提唱で始まったESDの10年は、今秋、愛知・岡山の世界会議で最終を迎える。195のユネスコ加盟国から2,000名が参加予定で、過去最大級のユネスコ会議になることが見込まれ、世界各国の取り組みを振り返ると同時に、後継に当たるグローバルアクションプログラムなど、2015年以降の方策について議論される予定だ。



開会式にて挨拶する、環境パートナーシップオフィス等運営委員長 阿部治氏

「ESD地球市民村」は、秋の世界会議に先立ち、日本国内の協働を促す重要な場として、8月20～22日に国連大学で開催された。会議は20日の「ESD実践モデル全国会議」（主催：「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム事務局）と、21・22日の「ESDの10年・地球市民会議2014」（主催：文部科学省）の2部構成で開催され、自治体・企業・教育者・研究者・子どもたちなど、地域や未来をつくるさまざまな関係者が集まり、地域の在り方や、教育の課題と展望、持続可能な社会に向けた議論が交わされた。「ESDの10年・地球市民会議2014」は、自治体、経済・労働団体、NPO・NGO関係者、学生といったステークホルダーごとに4つのセッションで構成され、それぞれ二人のコーディネーターを軸に、活発な討議が行われた。

会議間のランチタイムにも、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州各地域から、「地域版ESD環境教育プログラム」の紹介や、実践を通じての学びが発表され、地域の個性を実感すると同時に、ESDの特徴である多面性や、未来を想像し、計画を立てていく様子が見て取れた。

この会議の特徴は、まさしく「参加者の多様性」にあり、さまざまな立場の登壇者が各自の立場に固執するのではなく、その立場から一歩踏み出して、どのような協働が

できるのか、それを未来にどうつなげていけばいいのかを議論した点にあるだろう。

日本の市民社会からの提言

クロージング全体会議では、「ESDの10年・地球市民会議2014」からの提言案として、6つの柱が示された。

1. 情報の共有：ESDの取り組み方や支援の情報を共有し、活用できる仕組みをつくろう。
2. つなぐ人の活躍：ESDの視点を持った調整員が活躍できる場をつくろう。
3. 実践をほめる：さまざまなESD実践に光を当て共有しよう。
4. 国際的な連携：世界との学びあいと連携を進めよう。
5. 地域の仕組み：地域ぐるみでESDに取り組む仕組みを強化しよう。
6. 連携のプラットフォーム：ESD推進のためのプラットフォームを各地域と全国レベルで進めていこう。

※会議発表資料より

この提言案として示された6つの柱は、さらに推敲を重ね、最終的には日本から世界へ、2015年以降のESD展開に向けた提言として発信される予定だ。さまざまな立場からの知恵を終結し、未来に向けて新たなスタートが切れるような提言になることを期待する。



情報発信＆ラーニング・プログラムにてESD環境教育プログラムを発表